

脳卒中とは早期診断、早期治療が重要です

脳卒中は脳に酸素や栄養を送っている血管が詰ったり、破れたりして脳細胞が死んでしまう病気です。血管が詰まる病気には脳梗塞、破れる病気には脳内出血、くも膜下出血があります。突然手足の麻痺やしびれがでたり、言葉がしゃべれなくなったり、意識がなくなったりします。日本国内の死亡原因では、ガン、心臓病、肺炎に次いで4位です。後遺症が残り、生活が困難になる方もいらっしゃいます。脳卒中は早期診断、早期治療が重要です。

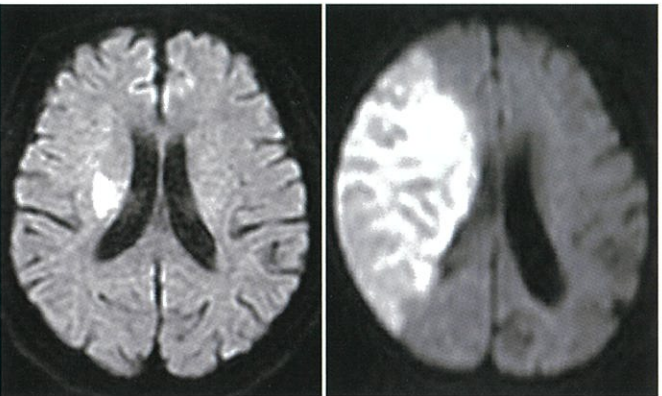
泉本 一 ● 河北総合病院脳血管内科学部長

脳血管内科は脳卒中の内科治療を行うだけでなく、カテーテルを用いて脳卒中の治療を行うことを得意とする科です。カテーテル治療の一部をご紹介します。

● 脳梗塞の緊急治療

脳梗塞は脳血管が詰まり脳細胞が死んでしまう病気です。脳につながる血管が動脈硬化等によって狭くなったため、あるいは動脈や心臓内に出来た血の固まりが脳の血管に流れて詰まる等して起こります。脳細胞に血液が流れなくなるので酸素や栄養が供給されず、脳細胞が死んでしまいます。突然起こるもの、段階的に悪化するもの、前ぶれがあるもの等があります。

太い血管が閉塞すればより多くの脳細胞が死に、より強い症状が出ます。



写真①

写真①は脳梗塞の方のMRI写真です。白い部分の脳細胞は脳梗塞に陥り、

死んでしまっています。脳梗塞が大きければ重症です。

急性閉塞した太い脳血管を、脳細胞が死滅する（脳梗塞に陥る）前に再開通させれば、症状が劇的に改善する可能性があります。点滴治療（t-PA）



写真② 脳梗塞緊急再開通治療

とカテーテル治療の2つの方法があります。写真②の患者さんはカテーテル治療に成功し、つまっていた血管が再開通しました。左手足の麻痺がなくなり、歩いて退院できました。

t-PA、カテーテル治療ともに重症脳梗塞を劇的に改善させる可能性のある有効な治療です。しかし治療を行うには時間制限があります。t-PAは脳梗塞を起こしてから4・5時間以内に点滴開始しなければいけません。カテーテル治療を行える場合はMRI等で判断しますが、時間は限られています。もちろん緊急治療を行えない、ま



いずもと はじめ 氏

主な専門分野/脳卒中全般、脳血管内治療
認定専門医/日本内科学会認定内科医、日本神経学会専門医・指導医、日本脳血管内治療学会専門医

たは症状が軽いなど行わない人も、速やかに脳保護薬点滴などし、症状の進行を食い止める必要があります。脳梗塞を疑う患者さんはただちに病院を受診してください。

● 脳梗塞を防ぎましょう。

脳梗塞の原因はなんでもよいでしょう。多くは糖尿病、高血圧、脂質異常、喫煙、そして不整脈です。健康診断を受け事前にこれらを治療し、必要に応じて血液さらさらの薬を内服していただくことで、多くの脳梗塞は防ぐことができます。脳梗塞は起こってしまうと後遺症が残ることも多いので、起こさないことの方が大切です。是非、健康診断を受けましょう。

しかし長期間動脈硬化が進み、すでに血管がかなり細くなっていると、糖尿病、高血圧、脂質異常などを治療し、さらに血液さらさらの薬を服用しても脳梗塞を起してしまう場合があります。頸動脈狭窄症と言われるものが、これに当たります。頸動脈後細くなるという状態は血液の量が減ったり、動脈硬化のかけらが脳に流れて詰まるなどして脳梗塞を起します。内服薬でコントロールできない場合、手術療法を行うことがあります。頸動脈内膜剝離術と言われる手術と、頸動脈ステ



写真③ 頸動脈ステント留置術
細かった血管にステントと呼ばれる金属性の筒をはめ、拡張します。

ト留置術と呼ばれるカテーテル治療があります（写真③）。頸動脈内膜剝離術は全身麻酔下に頸動脈を切開し、溜まっているプラークと呼ばれるコレステロールのかたまりを除去します。一方頸動脈ステント留置術は頸動脈の狭窄部分にステントと呼ばれる金属の筒を留置して、血管を拡張させます。局所麻酔下に右足の付け根からカテーテルを挿入することが多いです。全身麻酔下手術である頸動脈内膜剝離術と比較して体の負担が小さく、高齢者や様々な合併症のある方も行うことができます。ただし合併症のリスクもありますので、狭窄の軽い方は内科治療で経過をみることも多いです。手術療法の見方は、症候性

（脳梗塞をすでに起こしたことがある場合）50%以上、無症候性（まだ脳梗塞を起こしたことがない場合）80%以上の狭窄です。

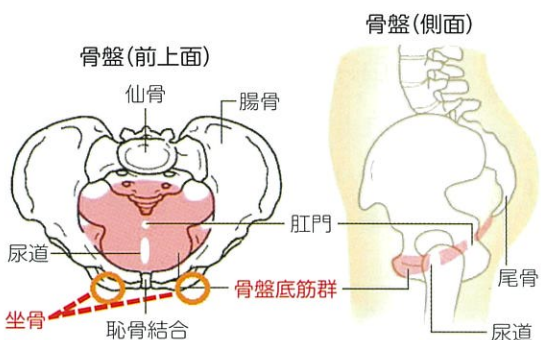
● その他のカテーテル治療

脳梗塞の緊急治療や予防のためのカテーテル治療の他にも、くも膜下出血治療、予防のための脳動脈瘤コイル塞栓など、様々なカテーテル治療が可能です。

動脈硬化危険因子をお持ちの方、脳梗塞や脳内出血（脳梗塞、脳内出血の跡がある）、頸動脈狭窄や脳動脈瘤等と言われた患者様、ぜひご相談ください。頸動脈狭窄や脳動脈瘤等が検査で既に見つかった方でも、見つからない方でも構いません。異常の有無治療方針を最初から調べさせていただきます。

ヘルスな話 「腹圧性尿失禁」

『咳やくしゃみをした時』『重い物を持った時』『前立腺全摘出後』に漏れる症状を腹圧性尿失禁といいます。この原因の1つに骨盤底筋群の筋力低下が挙げられ、骨盤底筋群は内臓を支えるようにハンモック状になっています（図参照）。肛門の前方部分（女性は膣と肛門の間）を直接接触とわかりやすく、入浴時などの清潔にした状態で確認してください。今回は、その骨盤底筋群のストレッチをお伝えいたします。



ストレッチ

筋肉は、しっかり収縮するためには適度な軟らかさが必要です。写真のような姿勢をとりながら、吸った時に坐骨と坐骨の間が広がっていくようなイメージをもちながら、ゆっくりゆったりと深呼吸します。ぜひ、試してください。

